国立国語研究所学術情報リポジトリ

Long-Term Record of Spoken Language Training for Congenital Deaf-blind Children and its Preservation Activities

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊池, 英明, 市川, 熹, 岡本, 明, 長嶋, 祐二, 藤本, 浩志, 引田, 秋生, HIKITA, Akio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001657

先天性全盲ろう児の音声言語訓練長期記録の分析状況及び保存活動

菊池英明[†1]、市川　熹[2,1,3]、岡本　明[4]、長嶋祐二[3]、藤本浩志[1]、引田秋生[5]
([1]早大、[2]千葉大、[3]工学院大、[4]筑波技大、[5]元山梨県立盲学校)

Long-Term Record of Spoken Language Training for Congenital Deaf-blind Children and its Preservation Activities

H. KIKUCHI (WASEDA Univ.), A. ICHIKAWA (CHIBA Univ.), A. Okamoto (Tsukuba Univ. of Tech.),
Y. NAGASHIMA (KOGAKUIN Univ.), H. FUJIMOTO (WASEDA Univ.),
and A. HIKITA (Yamanashi Prefectural School for the Visually Impaired)

要旨

山梨県立盲学校での先天性全盲ろう児に対する音声言語獲得訓練と生活指導に関する数万点に及ぶ、1950（昭和 25）年からの長期時系列的多角的記録と教材資料などが残されている[1]～[4]。梅津八三東大教授が指導し、一貫して進めてきた盲人の認知行動・心理の研究の知見をベースに，先天盲ろう児への教育という未知の課題に対して取り組んだ科学的研究の実践過程記録である。言語獲得が極めて困難な先天性盲ろう児に対する数万件の実践記録群は、おそらく世界で唯一の極めて貴重な資料であり、盲ろう児当事者から表出された点字や録音資料からは、学習の進行程度を直接見ることが期待される。言語獲得プロセスの解明や盲ろう児教育に重要な示唆が得られるであろう。しかし最も質の悪い時代の紙や録音テープ等に記録され劣化が著しいため、現在電子化保存と「データベース開発」(DB 化）を進めている。DB 化後は山梨県立盲学校に移管、公開する計画である。訓練記録、訓練経緯、同校での分析状況および発音訓練用の木製口模型などの教材、現状の同保存活動等を紹介する。

１．先天性全盲ろう児教育海外事例と本事例

先天全盲ろう児の教育の試みは世界的には 19 世紀後半ころから行なわれ始めたようである。米国のヘレン・ケラー（1880～1968)，ローラ・ブリッジマン（1829～1889)、ロバート・スミスダス(1925～2014)、ソ連（現ロシア）のオリガ・イワノヴァ・スコロホドワ（1911～1982）などの例が報告されているが[5]～[8]、何れも逸話的あるいは理念的で、具体的データが示されておらず、その後の検証が困難である。

一方本報告で取り上げる資料は、長期にわる複数名の公私の日々の具体的状況に関する多角的側面の記録と教材であり、方法論の検証も期待できる貴重な事例である。

２．山梨盲における先天盲ろう教育[1]

２.１　教育の開始

1948（昭和 23）年、山梨県立盲唖学校（当時）の堀江貞尚校長は、県下の未就学の盲児、ろう児の実態調査を行なった結果、その中に盲ろう二重障害児がいた。堀江はその盲ろう T 男（5 歳）の教育を決意した。

その後、校長は三上鷹麿へと変わったが、堀江の考えを理解し盲ろう児への教育に熱意を傾けた。やがて横浜から S 子（7 歳）が加わった。日常の基本的習慣づけから始められ、教員・寮母たちの献身的な努力により、歯磨きや手洗い、食事，着替えなども自分でできるよ

† kikuchi@waseda.jp

うになった。

次に言語獲得の訓練が行われている。点字と物との結び付けの訓練が、彼らが好きな飴や菓子と「あめ」「かし」と点字で打ったカードを工夫して、忍耐強く続けられたが、のどや唇を触らせて言葉を読み取らせる「触話法」もほとんど進まず、教員たちの焦りと諦めは強まっていった。堀江は「盲児への教育経験から、盲ろうであっても比較的簡単に言語シンボルを理解させることができると考えていたが、楽天的空想に過ぎなかった」と述懐している。

２.２　梅津八三らによる教育研究実践

1951（昭和 26）年、山梨盲に訪ねた梅津八三東大教授が盲ろう児二人に出会い、その半年後には教諭たちの試行錯誤の結果、約 30 種類の身振りサインでの交信が周囲の人との間にでき、日常の行動をコントロールできるようになっていた。

三上と梅津は、複雑多様な内容に対応できる「言語行動」を獲得することを目標とし、1952（昭和 27）年には「盲聾教育研究会」を発足させている。研究会メンバーは頻繁に山梨盲を訪れ、夏休みには合宿を、また盲ろう児を自宅に泊まらせてともに生活、科学的知見に基づく教育方法が模索・実践された。この教育実践の状況を克明に記録し，授業ノートや指導記録、盲ろう児の日記（点字など）、往復書簡（同）などのデータ類すべてを残している。

梅津はいきなり点字の訓練をするのではなく、物の形に対する概念形成の訓練から始めている。板に三角形、正方形、円形の穴が開いていて、それにはまる形の板をはめ込む「形態板」作業や、点の位置の識別の訓練を、次に実物と点字の対応付け訓練を行い、物の名前の点字カードと、名前の点字を貼った物を比べて選ばせた。物と点字の間に対応関係が成立するようになり、単語は徐々に増え、動詞なども学習、文章を組上げて高単位の交信ができるようになった（約 2 年）。

つづいて音声による発信の訓練を行っている。まず口の形をつくることを教え、次に意図的に息を出すことや、声帯を緊張変化させることへと順に進み、この 3 つを統合して訓練し、徐々に言葉が出せるようになった（約 1 年）。

ローマ字指文字による言葉の受発信も訓練され、さらに算数、社会などの教科の学習も行なわれた。これらは点字学習、発声の矯正などもあわせて T 男、S 子や、その後入学した 2 名の盲ろう児が転校や卒業するまで続けられた。

３．教育実践の記録・資料

３．１　山梨盲での保管・整理

彼らの卒業後，1971（昭和 46）年に盲ろう学級は閉鎖され、当時担当だった志村太喜弥教諭は国立特殊教育総合研究所（現国立特別支援教育総合研究所、以下特総研）に転出、盲ろう児教育は特総研付属の国立久里浜養護学校に引き継がれ、資料も特総研に移管、梅津とともに整理が行われた。梅津はこの資料・データ類に一つずつ克明にカードを作成し、番号を付けて整理した。資料はその後、中澤恵江研究員（現横浜訓盲学院学院長、全国盲ろう教育研究会会長）らによってさらに整理され、保管されていた。

その後 2007（平成 19）年に山梨盲から数名の教員が特総研を訪れて、集中的な整理作業が行われ、山梨盲で開かれた『盲ろう唖』教材・資料展などを経て、2011（平成 23）年、全ての資料は山梨盲へ戻された。

表１　盲ろう児教育実践資料群

1-1 盲ろう児からの点字資料
1-2 盲ろう児の日記類
1-3 指導記録類
1-4 成績、学級日誌、寄宿舎日誌
1-5 盲ろう児との往復書簡
2-1 概念形成学習教材（立体模型）
2-2 記号操作学習教材
2-3 教科学習教材
2-4 発声・口形教材
3-1 指導研究報告書
3-2 指導系統図
3-3-1 学校生活・日常生活映像

山梨盲では「盲ろう教育研究委員会」を設立、膨大な資料を保管し、また梅津が作成した教材の整理カードと教材実物との照合、資料の電子データ化などに取り組み、年報発行や資料展開催などの広報活動にも努めてきている。

３．２　保管されている教材・資料

保存されている資料群[1]~[4]を表１に、資料例や教材例を写真１～６に示す。

写真１～３は資料の現状の一部で、写真３からは資料の劣化状況が判る。写真４～６は音声訓練計画や教材、当事者からの録音音声テープなどの例である。録音テープも劣化が懸念されるため再生をひかえている。

写真１　保管されている資料の例

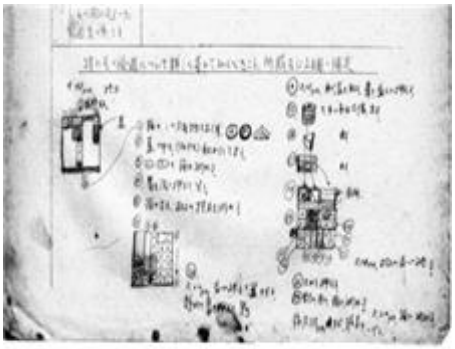

写真２　寮母による寄宿舎の日誌の一部

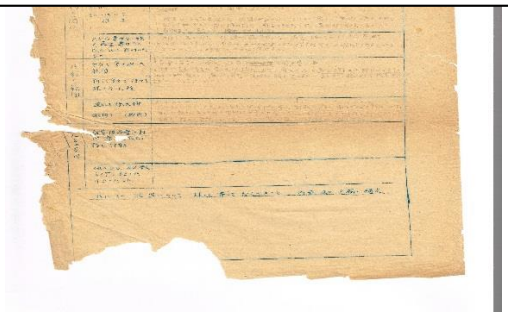

写真３　破損が危ぶまれる手書き記録の

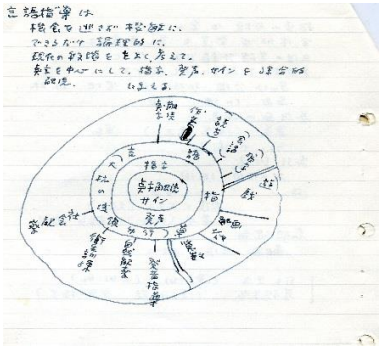

写真４　発声訓練の計画検討例

写真５　発声口形モデル

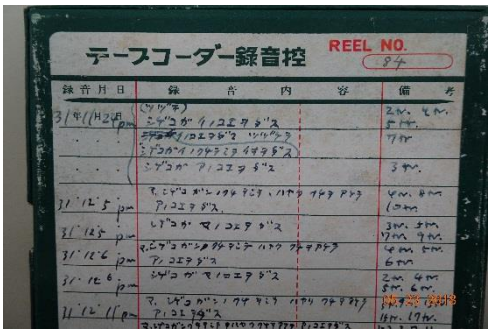

写真６　発音訓練音声記録例

「い」の声が出たという記録など

4. 資料の分析

4.1　梅津の論文

梅津の論文には，一貫して進めてきた盲人の認知行動・心理の研究の知見をベースに，先天盲ろう児への教育という未知の課題に対して取り組んだ科学的研究の実践過程が述べられている。これらには盲ろう児への働きかけとその結果については詳細に述べられている[9][10]。

4.2　盲ろう教育研究委員会による分析

盲ろう教育研究委員会により一部の資料については分析が進められ（写真７）、いくつかの報告書にまとめられている。

これらには，日本で初めての先天盲ろう児教育に関わった方々の献身的な取り組みの様子や，教育実践・研究の経過などがまとめられていて，歴史的にもまた研究資料としても貴重な文献である[11]~[23]。

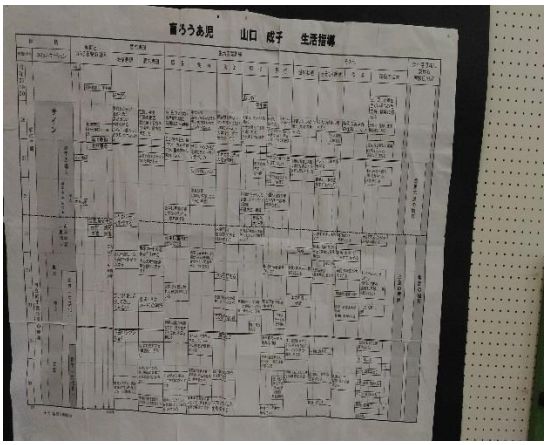

写真７　訓練の流れの分析例

しかし，物の概念，物の名前の理解が日常の個々の指導場面において，いつ，どう発現してきたかなど具体的なポイントについては、手作業による多量な資料を相互に関係付ける分析には限界があり、今後に残された課題である。各資料を電子化し関連付ける DB システムの開発が不可欠である。

5. 資料電子化と保管

5.1　電子化と DB 化の試み

山梨県立盲学校の「盲ろう教育研究委員会」ではこれまで前述のように全体の資料リストを作成、いくつかの資料の電子化を進めてきた。

しかし電子化は手を付けた段階にあり、以下のように電子化と DB 化の支援を進めている。本年度から本格的に電子化を開始しているが、資金調達と作業量の制約もあり、以下のように多くの方々の協力を得ているが、完成までには今後数年を要するものと思われる。

なお資料は旧仮名時代のものであるため、資料は点字も墨字も旧仮名遣いか誤字が混在している。しかし読み取りデータはそれ自体が時代と当事者の状況を反映したものであり、生データとしてそのまま記載する。表記（旧仮名）と音声訓練などの音声の違いも、学習への影響などの分析に有効な情報を提供するであろう。

5.2　電子化プロジェクトとその活動

上記の経験に基づき、新たに体制を作ることを検討、いくつかの大学と研究機関の研究者による「先天盲ろう児教育資料電子化プロジェクト」（以下、プロジェクト）が発足した。

プロジェクトの支援の基本方針

・あくまでも山梨盲の意向に沿った支援、協力であること（プロジェクトのステアリングメンバーは山梨盲の盲ろう教育研究委員会から「外部調査研究員」の委嘱を受け、連携を密にして進めている）。
・電子化資料の著作権・所有権を山梨盲に集約させること。
・資料番号などは特総研と山梨盲で付与したものを変更しない。
・データ構造はこれまでの山梨盲での分析手続きと研究結果に整合性があること。

・活動のベースとして、科研費、民間の助成金などの獲得に努める。
・資料の劣化状況にかんがみ、文化財などの取り扱いの経験があり、技術力の高い機関に電子化を依頼すること。
・DBはリレーショナルデータベース(RDB)とすること。
・DBは、多くの研究者が利用できるように公開を計画すること。
・プロジェクトには言語獲得プロセスの探求および視聴覚障害児の言語獲得教育手法の開発を担当するグループを置き、その検討結果を上記DBシステムの開発にも寄与すること。

5.3　山梨盲ろう教育資料電子化事業実行委員会

しかし全資料の電子化には専門技術が必要であり、プロジェクトの資金は現段階では大幅に不足する見通しのため、別途盲学校関係者を中心に「山梨盲ろう教育資料電子化事業実行委員会」を設立、プロジェクトと並行して募金活動を行い、分担して電子化を進める体制を作っている。

謝　辞

本資料の作成と保存に今日まで継続的に取り組まれてきた中澤恵江先生はじめ特総研での関係者、白倉明美先生（現山梨県立ふじざくら支援学校教頭）はじめ山梨県立盲学校および同校盲ろう教育研究委員会などの関係者の皆様、電子化保存とDB化を進めているプロジェクトおよび山梨盲ろう教育資料電子化実行委員会のメンバーの方々に感謝いたします。

本研究の一部はJSPS科研費 JP18HP7002の助成を受けたものです。

文　献

[1]岡本 明,“先天盲ろう児教育の夜明けー山梨県立盲学校における実践記録ー”, ノーマライゼーション, pp.36-38, Aug. 2012
[2]文部省初等中等教育局特殊教育課, 山梨県立盲学校における盲聾教育に関する研究ー文部省指定実験学校報告書ー, 1970
[3]中澤恵江編, 心理学梅津八三の仕事, 第 1 巻～第 3 巻, 春風社, 2000
[4]『山梨県立盲学校盲ろう教育研究委員会年報』第 3 号, 山梨県立盲学校, 2014
[5]William Wade, The Blind-Deaf: A Monograph, HECKER BROTHERS, 1901
[6]メシチェリャコフ, 盲聾唖児教育ー三重苦に光をー, 坂本市郎訳, ナウカ, 1984
[7]広瀬信雄著, 盲ろうあ児教育のパイオニア・サカリャンスキーの記録, 文芸社, 2014
[8]広瀬信雄編著, もう一人の奇跡の人～「オリガ・I・スコロホードワ」の生涯, 新読書社, 2012
[9]梅津八三,“盲ろう児の言語行動の形成”, 精神薄弱児研究, 昭和 52 年 10 月号, 1977
[10]梅津八三, 重複障害児との相互輔生行動体制と信号系活動, 東京大学出版会, 1997
[11]堀江貞尚,“ろう盲(二重障害)児”, 東北大学教育学部研究年報, 昭和 28 年, 1953
[12]藤口透吾, 0 学級の子供たち, 誠心書房, 1956
[13]山梨県立盲学校, 昭和 36 年度文部省指定実験重複障害児研究報告書―盲聾唖教育の研究―, 1962
[14]山梨県立盲学校編, 盲ろうあ教育, 山梨県立盲学校, 1965
[15]志村太喜弥, 重度・重複障害児の教育盲ろう児の指導実践に学ぶ, コレール社, 1989
[16]冨田和子, ある盲聾児の初期指導, 山梨県立盲学校, 1997
[17]ヴァスクレセーニエ編集部編, 広瀬信雄訳, みえる・きこえる 指先の世界, 新読書社, 1977
[18]1997 山梨県立盲学校, 創立 80 周年(盲ろう教育開始 50 周年)記念誌, 1999
[19]山梨県立盲学校, 創立 90 周年記念誌, 2008
[20]山梨県立盲学校, 山梨県立盲学校創立 90 周年記念事業盲学校講話シリーズ講話集, 2008
[21]山梨県立盲学校, 山梨県立盲学校盲ろう教育研究委員会年報第 1 号, 2011
[22]山梨県立盲学校, 山梨県立盲学校盲ろう教育研究委員会年報第 2 号, 2012
[23]白倉明美, 岡本 明, 盲ろう教育・福祉 ～山梨県立盲学校での先天盲ろう児教育～, 日本盲教育史研究会第 3 回研究会, 2014